COT 臨床作業療法
Clin Occup Ther
Vol.16 No.5 2019

特集

現場で活かそう作業科学

編集担当　渡邊 基子

331 ● 作業科学とは　坂上 真理
337 ● 復職に向けた協働のプロセス
—作業の知識を活かした病院での取り組み　大下 琢也，他
342 ● がん患者が入院生活で見出した
希望に影響を与える他者の存在と関係性　安田 友紀
348 ● 作業科学で視る介護老人保健施設
—作業的公正の視点を通して　真田 育依
353 ● だから，作業“科学”が大好きです！
—体験者が伝える作業とは？　葉山 靖明
357 ● 作業科学と作業療法　ボンジェ・ペイター

アラカルト

巻頭頁　はじまりのことば…川口 淳一
目次前　カメラマン川上哲也の見た世界
370　既刊案内
385　今月の表紙の「ことば」
394　インフォメーション
395　次号予告

連載

362 はじめての患者さん
新人時代の振り返りと印象に残ったお二人から学ばせていただいたこと　山本 伸一

365 甦るヒストリー―再掘作業療法：私のたどった細道
荒波にもまれて　浅海 捷司

373 責任者はつらいよ，でも楽しいよ
考える前に行動，なんとかなる!!　藤原 太郎

377 未来の作業療法☆設計図
自費領域での可能性と未来デザイン　金子 唯史

383 見せます！ OT 室のちょっとしたアイデア
地域に根差した作業療法室の紹介　鴨下 賢一

コラム

380 OT として私が大切にしていること
人生 90 年時代―60 歳から先の作業療法士は何を大切に生きましょうか　浅野 有子

386 社会の目・OT の目
多様な社会の中で，生きる気づき　浅倉 恵子
作業療法士のアウトプット　宮本 昌寛

388 女性 OT ひとりで悩まないで
働く妻を持つ夫として考えること　宇田 薫，他

390 【3 年目編】3 年目 OT あゆみちゃんの回復期リハ病棟記
はじめての学会発表　吉川 歩

392 作業療法の場面でまちがいさがし　パント大吉

特集

現場で活かそう作業科学

作業科学とは

Mari SAKAUE
坂上 真理
●札幌医科大学保健医療学部作業療法学科，作業療法士

内容を理解するためのキーワード　●基礎科学　●作業科学研究　●作業のレンズ

作業療法のポイント
- ●作業科学はどのような学問か
- ●作業科学の歩み
- ●作業科学が教えてくれること

はじめに

この特集の第一走者である私の役割は，作業科学の概要を読者に伝え，皆さんには作業科学を身近に感じ，この学問との付き合い方のヒントを得てもらうことである。ここでは作業科学についての私の物語を交えて紹介したいと思う。

作業科学が日本で初めて紹介されたのは，1995年に札幌市で開催された日本作業療法士協会主催の第28回全国研修会だった。「作業療法の臨床の質を問う」をテーマとした研修会で，南カリフォルニア大学（以下，USC）のFlorence Clark先生が新しい学問領域である作業（科）学についての基調講演を行った。司会は，故・佐藤剛先生。会場の最前列には，Ruth Zemke先生が座っていらした。当時，老人保健施設に勤務していた私もそこにいた。その頃は，臨床に出て5年目になり，仕事が面白くなっていた。その反面，“作業療法士”だからこそできたという実感に乏しく，施設の中で“リハビリの人”と大きく捉えられていることに漠然と不安を感じていた。さて，Clark先生の講演は，正直に言うと英語も翻訳も難しかった。講演内容を咀嚼できないまま座っていると，講演後の質疑応答が熱気を帯びてきた。会場から，ある作業療法モデルとの違いを尋ねる質問が上がっ

特集

現場で活かそう作業科学

復職に向けた協働のプロセス
―作業の知識を活かした病院での取り組み

Takuya OJIMO　Shingo YAMANE
大下 琢也[*1]，山根 伸吾[*2]
●[*1]嶋田病院
●[*2]広島大学大学院医系科学研究科（保健学）

内容を理解するためのキーワード　●クライエント中心　●協働　●復職

作業療法のポイント
- ●作業を通して評価・介入・記録を行い，作業で成果を示す。
- ●作業療法士として作業の知識を活かし，クライエントと協働して意思決定を支援する。

はじめに

回復期リハビリテーション病棟では，入院患者に1日当たり最大で9単位・3時間のセラピストが介入するリハビリテーション（以下，リハ）が処方される。その意味で手厚いリハの体制が整備されている反面，病院の均質的な環境は，入院患者1人ひとりにとって個別的な作業を，その人らしい生活の文脈から切り離してしまう問題を孕んでいる。病院という管理された医療の環境に作業を持ち込むことは容易ではないが，そのような場でも「作業の可能性にチャレンジする」[1]という，病院で働く作業療法士としての責任がある。

本稿では，回復期リハ病棟における事例を通して，筆者の臨床実践における作業科学との関わり方を紹介したい。

事例では，復職に向けた作業に入院中から取り組む中で，作業の文脈から切り離されやすいという課題を有していた。作業療法で意識したことは，作業を通して評価・介入・記録を行い，作業に焦点を当て続けること，よりミクロな視点で言えば，臨床におけるクライエントの意思決定支援に作業の知識を活かすことであった。

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY

特集

現場で活かそう作業科学

がん患者が入院生活で見出した希望に影響を与える他者の存在と関係性

Yuki YASUDA
安田 友紀
●社会医療法人有隣会 東大阪病院

内容を理解するためのキーワード ●作業の形態・機能・意味 ●希望 ●他者交流

作業療法のポイント

- ●作業療法を行うにあたり，クライエントの価値観を含めその人の作業を捉える必要がある。その際，作業歴の把握に加えてそれぞれの作業の形態，機能，意味の視点で捉えることで，クライエントの全体像をより把握することができ，より良い協働関係を築くことができる。
- ●クライエントの作業を捉え，クライエントらしい生活ができるような作業や環境を提供することは，クライエント自らが自分の作業と向き合い，自らの生活をより良くしようと主体的に生活を送ることへとつながる。
- ●作業は自分の過去と未来をつないだり，人と人とをつないだりする要素をもっており，それによりさまざまな感情を抱き，自己の存在が規定され，健康・幸福へとつながる可能性をもつ。

はじめに

作業は doing，being，becoming，belonging の統合であり[1]，その作業は形態，機能，意味の視点で捉えることができる[2]。このことから作業療法（以下，OT）で捉える作業とは，クライエント（以下，CL）の作業歴や価値観などの個人的文脈をもつものであるということができる。

今回担当した事例（以下，A 氏）は，若い頃から他者とつながりをもち，役割を担う作業に従事してきたが，がん発症や入院という転機により身体機能や ADL 能力低下，他者交流制限が生じ，これまで大切にしてきた作業への参加が困難となった。しかし，A 氏は入院中，他者と関わることのできる作業を通して日々の経験や感情を他者

1881-6339/19/¥400/論文/JCOPY

特集

現場で活かそう作業科学

作業科学で視る介護老人保健施設
―作業的公正の視点を通して

Ikue SANADA
真田 育依
●茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科

内容を理解するためのキーワード ●介護老人保健施設 ●作業的公正 ●作業的不公正

作業療法のポイント

- ●介護老人保健施設入所者が「作業的公正状態にあるか？」と疑問を持ちながら実践を行うことは大切なことである
- ●作業をすることを「本当に諦める」前に，実際にその作業をやってみるといった，入所者が自身の能力を知る機会を作ることが望ましい
- ●入所者の作業的公正な状態について評価することは，たとえ生活する場所が変わっても，作業的公正であり続ける環境を整えるための一助になりうる

はじめに

「介護老人保健施設（以下，老健）に入所されている高齢者は暇じゃないのかな？」「老健に入所されている高齢者は，自分のしたいことができていないのではないか？」という疑問は，筆者が老健で作業療法士として勤務しながら感じていたことである。今回は，老健入所者の4名へのインタビューをもとに，作業的公正・作業的不公正といった視点を通して，老健における作業療法介入について議論を深めたいと思う。

作業的公正・作業的不公正の概念

「作業的公正」は，Townsend と Wilcock によって提案された概念であり，人間はさまざまな種類の意味のある作業に従事できるための平等な機会や資源を有するものであると述べている[1)2)]。

また，作業的公正が侵されている状態を「作業的不公正」とし，その中でも老健で生じる可能性のある作業的不公正の状態には「作業疎外」「作業剝奪」「作業周縁化」「作業不均衡」がある。

1881-6339/19/¥400/論文/JCOPY

特集

現場で活かそう作業科学

だから，作業“科学”が大好きです！
―体験者が伝える作業とは？

Yasuaki HAYAMA
葉山 靖明
●株式会社ケアプラネッツ

内容を理解するためのキーワード ● Power of occupation ● Narrative ● Participation

作業療法のポイント
- ●病を見るな，作業を見よ！
- ●作業の力は，障がいを消す！
- ●OT の作業的思考は，当事者の人生を尊く素晴らしいものにできる！

はじめに

私は，40 歳の時に左脳内出血を発症し，現在 54 歳のカタマヒ者である。

「デイサービスけやき通り」の発起人であり，株式会社ケアプラネッツの代表取締役でもあり，日本作業科学研究会員でもあり，時に「旅」という作業を楽しむ九州の男子である。

ここでは，私の体験としての「作業」「作業科学」を書くことにする。少し主観的ではあるが，あえてそう書くことを，お許し願いたい。

回復期病院での「パスタを作る」という作業

2006 年の冬，その頃勤めていた専門学校の会議室にて，左脳内出血を発症した。右半身の重度の感覚麻痺は，まるで，自分の右半分が消えたようだった。自分と，家族と，職業の未来が遮断された（図 1）。家族とは，妻と，8 歳，5 歳，2 歳の子どものことである。

さらに，動かない右半身と共に，自分の存在（presence）が社会から徐々に霞んでいくのが苦しかった。社会の中で“透明人間”になったような錯覚を覚えた。

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY

特集

現場で活かそう作業科学

作業科学と作業療法

Peter BONTJE
ボンジェ・ペイター
●首都大学東京 日本作業科学研究会

内容を理解するためのキーワード ●作業科学 ●作業の力 ●作業的な視点

作業療法のポイント

- ●作業科学（OS）は，作業療法のための不可欠な科学である。
- ●作業は，日常の作業や治療的作業を通して人々が経験する作業の力が，人々が健康とウェルビーイングの経験をあたえる。
- ●3 人称で定式化された理論やモデルを，2 人称と 1 人称の視点に変化できれば，クライエントを中心とする作業に基づく実践がさらに効果的になるだろう。

はじめに

作業科学（以下，OS）は作業療法（以下，OT）のための主要な科学となった。これは，例えばOSに関する WFOT の声明[1]からも明らかであり，世界中で多くの OT 教育プログラムが，OS を OT のための知識基盤と認識している。しかし，OS と OT の関連性は，多くの作業療法士にとって不透明なままである。それにもかかわらず，OT 実践に対する OS の影響は確認することができるため[2]，私は，「現場で活かそう作業科学」という本特集の現場から見る作業科学に関する論文を参照することによってそれを確認していきたい。本稿の目的は，OS が OT の実践に提供する知識を明確にすることである。特に作業的視点・レンズ，作業の力，変化を理解すること（すなわち，移行理論・トランジション理論），また，作業と健康・ウェルビーイングとの関係，およびシステム理論（3 人称の思考）からナラティブや相互浸透（トランザクション）理論や参加型アプローチ（1 人称および 2 人称の思考）への OS における動向を参考にしながら，OT への OS の貢献のいくつかを説明することである。

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY

連載

はじめての患者さん

3

新人時代の振り返りと印象に残ったお二人から学ばせていただいたこと

山本 伸一
山梨リハビリテーション病院

作業療法士になったのは，昭和62年。団塊の世代がバリバリ働いていた頃である。まだまだバブルの時代であったものの，いいことばかりは続かないと誰もが理解をしていて，日本はどこへ向かうのかという不安も心のどこかであったであろう。医療はというと，基準看護ではなく付き添い制度が残っていたため，リハビリテーション（以下，リハ）分野においても障害を持って入院することはお金がかかるという時代。算定上限日数もなく，いくらでもリハを受けられる。もちろん，回復期リハ病棟なんて存在しない。介護保険もまだ先の話。言い方を変えると「漫然としたリハ」，患者側から見たら「好きなだけ受けられるリハ」である。障害の受容は，患者自身で決めていたように思う。早く退院する，納得するまでリハを続ける。どちらも言い分があると思う。これは，平成18年の診療報酬改定まで続いた。その年に算定上限日数，いわゆる13単位が始まったのである。

一方，私の作業療法士の名簿登録番号，つまり厚生労働省における免許番号は「2691」。全国で3,000名に満たないため，もちろん作業療法士は各病院で1人といった職場もほとんどであったろう（2019年7月現在の有資格者数は，約94,000名）。当時は，「自分の担当患者が20名30名なんて当たり前。そのため，目まぐるしく1日が終わる。それでもみんな輝いていた。未来を見ていた。図1，2は，現在私が会長を務めさせていただいている活動分析研究会の第1回の勉強会。私も若い（笑）。たしか作業療法士になって2年目頃だったと思う。図3は，おそらくその時の懇親会。イッ

1881-6339/19/¥400/論文/JCOPY

甦るヒストリー
――再掘作業療法

私のたどった細道❹

荒波にもまれて

浅海 捷司
■在職した職場
国立武蔵療養所 東京都東村山福祉園
社会福祉法人かがやき会就労センター“街”
日本医療科学大学

作業療法士資格取得への道で

武蔵療養所に就職して5年ほどした頃，OTの養成や資格制度を定めた法が準備されていることを知った。仕事が公的に認知される時代になったと感じた。しかしテラピストの職名にあった私や作業指導員はどうなるのか，一抹の不安があった。

法案審議に入った国会の動きを知る中で，この法の制定過程には，精神医療界が置き去りにされていることを知り愕然とした[1)]。

置き去りにされた国家試験

1966年2月，第1回国家試験が開催された。関連領域にあった者への特例措置があったが，受験資格取得講習が精神領域にあった者へ開かれておらず，受験することができないことが分かった。

私たちの立場を理解された日本精神衛生会（秋元波留夫理事長[2)]）主催で講習開催の運びとなった。さっそく仲間たちに知らせ，東京大学で開かれた夜間の講習に通った。

指定講習会での学び

前号で紹介した都立松沢病院の堀切重明氏は国試受験しないにもかかわらず学びたいと参加した。受験者だけを対象にした講習会だったが，主催者はその意図を理解し受講できることとなったのであった。

これまでは作業療法に携わる者への教育は院内教育レベルを超えるものはなかったが，作業療法従事者の養成はその延長線上に発展的に位置づけし，再教育の機会を並行させるべきではなかったか。私たちを切り捨てるこの制度作りに関わった人たちへの姿勢に憤りを感じた。これまでにこの国にはなかったまったく新しい専門職という位置づけで，この資格制度が生まれたのであった。

上田敏先生をはじめその道の専門の医師による講習会では，精神領域の中だけにいたので解剖学

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY

責任者はつらいよ，でも楽しいよ 10

藤原 太郎
（株式会社和ごころ）

考える前に行動，なんとかなる!!

はじめに

「責任者はつらいよ，でも楽しいよ」この言葉を聞いて日々を振り返ってみると，そうかぁ，そういえばつらいような気がするが，楽しさ，やりがいのほうが大きい気がする。このコラムを執筆するに当たり，毎日をあまり振り返らない生活を送っていると痛感した。せっかくの機会，自分自身を振り返らせていただきながら，その中で目を留めてくださっている皆さまにひとつでもお役に立てることがあれば幸いである。

モットー

①「何とかなる」

人見知りでどちらかといえば何事にも自信があるほうではない。でもこの言葉に支えられ，現在に至っている。私は12年間の病院勤務の後，今まで携わることの少なかった訪問事業を開始し7年が経過したが，自分で事業を立ち上げることは大変な覚悟が必要だった。また，他分野の方との交渉など，目の前の対象者に目一杯支援してきた今までの経験以外のことが数多く求められる。毎度，不安が大きいが，考える前にまずやってみるといろいろな方と話や事業がつながることが多く，「やってよかった，なんとかなるもんだ」と振り返る毎日である。

②「和して同ぜず」

地域の中で他職種や住民，行政など周りと協調する場面は日常茶飯事である。良い関係性をもちながらも，むやみに合わせることなく専門性をしっかり発揮することを心がけている。

③「場がひとを育てる」

元々リーダーシップを発揮できる人間では決してない。今思えば，病院・訪問・その他事業にて年功序列から始まり，何でもやってみよう，頼まれれば断れない性格も功を奏し，部門をまとめる場や人前に立つ場を多く得られた。その中でも褒められ，おだてられて成長したと痛感する。部下にもそのような場を多くもてるよう配慮したい。また褒める，おだてることを大切にしようと思う。

④「ひとの話を聞く」

簡単なようで簡単でない。どうしても相手より先に言葉が出てしまうのをぐっと我慢する。職員と30分じっくり一対一で話し合う。沈黙を楽しむ気持ちで。職員間でそのような関係性がとれるとよいと思う。

現在の組織

株式会社和ごころは，筆者が代表取締役として大阪府和泉市にて2015年1月に設立した。①和泉（地域）に根ざすこころ，②和（つながり）を大切にするこころ，③和（日本の秩序，調和，礼儀）

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY

未来の作業療法☆設計図

5 自費領域での可能性と未来デザイン

金子 唯史
（ニューロリハビリ研究所，STROKE LAB，作業療法士）

はじめに

現在，作業療法士は約10万人に迫る有資格者が存在し，そのうち8割が病院や施設の臨床に携わっていると報告されている。一方，筆者は保険外である「自費分野」で「臨床×経営」の働き方を実践し，かなり少数派の働き方であると思われる。

最近の話題である「2040年療法士供給の超過問題」や，「医療費財源の縮小」を踏まえると，従来の保険に依存しない働き方やニーズは増えることが予測される。

今回，自費領域での可能性と未来デザインをテーマに，働き方の多様性を考えるきっかけになればと思い，以下にまとめていく。

現在の取り組み，その背景

筆者が運営している「STROKE LAB」は，2015年4月に東京都文京区にて開設した自費リハビリ施設である。当初は筆者1名で実施していたが，起業5年を経て，理学療法士2名，作業療法士1名が常勤，言語聴覚士1名が非常勤として2施設で事業展開している。

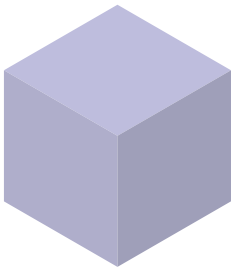
事業は，1．自費リハビリ，2．療法士向け講習会，3．リハビリ情報発信の3つで展開しており，以下に詳細を述べる。

1．自費リハビリ

自費リハビリの内容は，おもに機能回復へのサポートが中心で，面接などの対話を通じて目標設定し，たとえば麻痺手の生活への使用頻度や快適さの向上，姿勢不良の軽減に伴う介助量や労力の軽減などの依頼が多い。頻度は週1回の利用者が50％程度で，それ以外は週2回以上が25％程度，残りは2週間～1カ月に1度の利用となっており，医療保険や介護保険サービスとの併用が大半である。介入内容は神経筋促通アプローチが中心で，それに付随した自主トレ設定や家族への生活アイデア，介助教育を行い，1回が60～90分である。基本的には，作業療法士目線の「トップダウン型アプローチ」とし，日常生活で抱える問題の抽出

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY

OTとして私が大切にしていること



人生90年時代—60歳から先の作業療法士は何を大切に生きましょうか

（一社）あっとほーむいなしき，作業療法士，主任介護支援専門員
浅野 有子

作業療法士（以下，OT）として40年近くを歩んだ。作業療法は面白く自由な仕事で，自由であることは苦しくもあった。まだリハビリテーションという言葉も一般的でなかった昭和56年にOTとして世に出た頃から，たぶん今も，“作業療法”といっても，その意義・内容・効果は国民に広く浸透してはいないのだろう。いつも，OTとは何かを探しながら歩んだ40年だった。20代では治療的効果が大切だった。医療現場で医療費をいただく根拠を示したかった。30代では源流にこだわった。富岡矩子先生と交流させていただく中で，心が体や暮らしを導くこと，その心を支えながら暮らしを改善できるという専門性を示したかった。40代からは時代の変遷の中，認知症者支援・要援護高齢者支援・地域リハビリテーションにOTが有効であるということにこだわってきた。老健こそ地域のリハセンターだと取り組んできた。そして60代を迎えようとする今，介護支援専門員としての学びの中，改めてOTは重要な専門職だと感じている。対象者の力を信じてその力を発揮していただくこと，地域に資源を創造すること，多様な個性・専門性の仲間たちとの協働を大切にしていきたい。

OT OTが好き

作業療法，私の人生を支えてくれた生業（なりわい）。この道を歩み多くの出逢いがあり，その出会いは私の財産で感謝である。OTの仲間たちが，もがき，悩みながら良い仕事をしている様子に触れると勇気をもらった。感謝している。いろいろな困難や苦しい時があった。それでもこの仕事が好きだということ。これはOTであり続けるために大事な自分の気持ちとして確認しておきたいこと。OTが好きだという気持ちは大切である。

犀潟リハビリテーション学院の恩師である金子

1881-6339/19/¥400/論文/JCOPY

見せます！OT室のちょっとしたアイデア 4

地域に根差した作業療法室の紹介

鴨下 賢一
（リハビリ発達支援ルームかもん，作業療法士）

はじめに

2019年3月まで勤務していた病院のOT室は，外来患者から入院患者までが遊びや学習，ADL，コミュニケーションなどと幅広く対応できる部屋にしてきたが，生活とは離れた環境であった。2019年7月より開設した「リハビリ発達支援ルームかもん」では，より生活に密着し，地域生活を支えられるように工夫している。未完成であり，今後作り上げていく過程であるが，その一部を紹介したい。

見える工夫

子どものさまざまな特性や課題に対応できるように，設備を整えていること。またスタッフは作業療法士と教員で構成されていることである。見えない工夫としては，毎日子どもについてカンファレンスを実施し，他職種目線での情報共有や助言などをお互い行っていることである。例えば学習支援においては，姿勢や鉛筆などの学習に使用する道具の操作や工夫，認知特性に合わせた学習スタイルの提案を作業療法士が行い，実際の学習支援は教員が行い，行った結果がフィードバックされ，さらに検討を行いながら進めていることである。

仕事のしやすさの工夫

なんといっても一緒に働く「人」である。同じ思いを持った人が重要である。また，若者を育てられる環境づくりも大切にしており，自信をもって子どもと養育者に接することができるようにしている。基本的に残業はなく，土日祝日が休みであり，夜や休日は家族と過ごせるようにしている。子育て中のスタッフにとって，仕事のしやすさは重要なことである。子どもたちが安全に利用できるように，ガラス窓には板でガードし(図1)，扉の蝶番部には指詰め防止の工夫もしてあり（図2)，これも仕事のしやすさに役立っている。

設備の工夫

体を動かすことに不器用さのある子どもたちが，自ら進んで遊んでいるうちに体を使えているような遊具や設備の工夫をしている。天井からはブランコ，壁にはボルダリングといったワクワクするスペースである（図3，4)。体を動かすことが苦手な子どもも，他児と比較する必要がない環境なので，自分のペースで取り組めている。

コストの工夫

子どもたちが楽しみながら体を動かせ，学べるようにパーテーションで区切り，照明は割れないようにすべてLEDに変えルーバー付きにしてい

1881-6339/19/￥400/論文/JCOPY